

氏名	落合 康利
学位の種類	博士 (医学)
学位記番号	甲第 1249 号
学位授与の日付	平成 26 年 3 月 28 日
学位授与の要件	学位規則第 3 条第 1 項第 3 号に該当
学位申請論文タイトル及び掲載誌	
	表層性胃腫瘍 284 例 352 病変に対する内視鏡的粘膜下層剥離術の臨床的検討
Thesis	
学位審査委員 (主査) 教授	篠塚 望
	(副査) 教授 屋嘉比 康治、教授 今枝 博之、講師 永田 耕治

## 論文内容の要旨

### 1. 背景

近年の治療内視鏡における大きなトピックスの一つは、内視鏡的粘膜下層剥離術 (endoscopic submucosal dissection : ESD)による胃腫瘍に対する治療方法の開発である。日本においてESDは病変の一括切除が可能な信頼できる治療法として広く受け入れられている。しかし、平均寿命の延長に伴い高齢者の罹患者数が増加しているが高齢者に対するESDの安全性および有効性はあきらかではない。本研究において非高齢者と高齢者の短期および長期成績を比較検討を行い明らかにする。

### 2. 方法

埼玉医科大学国際医療センターで2007年4月から2010年3月までに表層性胃腫瘍に対しESDを行った284人を対象とした。方法としては連続した治療症例を65歳未満の非高齢者群と65歳以上の高齢者群の2群に分けてその安全性、効果、長期成績についての比較検討を行った。2群間の統計学的評価には $\chi^2$ 検定およびMann-Whitney 検定を用いp値< .05を優位差ありとした。

### 3. 結果

72人が非高齢者群(男性 61 人、女性 11 人、平均年齢 59.4 歳)、212人が高齢者群(男性 164 人、女性 48 人、平均年齢 73.5 歳)に分類された。平均切除検体径は 36 mm (範囲 10-60 mm)と 35 mm(範囲 12-110 mm) (P=0.44)であった。平均腫瘍径は 15 mm (範囲 2-39 mm)と 17 mm (範囲 1-94 mm) (P=0.89)であった。一括切除率は 96.2 と 98.9%であった(P=0.11)。断端陰性での完全一括切除率は 90.1 と 89.7%(P=0.74)であった。平均手術時間は 92 分と 80 分(P=0.045)であった。治療後入院期間は 6.4 日 (範囲 2-14)と 6.6 日(範囲 3-19)(P=0.24)であった。組織病理学的には非高齢者群においては腺癌 66 例、腺腫 15 例であり高齢者群においては腺癌 250 例、腺腫 21 例であった。偶発症については非高齢者群に穿孔 1 例、後出血 3 例を認め、高齢者群に穿孔 2 例、後出血 2 例を認めた(P=0.12)。穿孔した全症例がクリップ縫縮にて保存的加療で改善している。経過観察中に非高齢者群 4 例、高齢者群 7 例において他病死を認めた。治療偶発症もしくは原病による死亡は認めなかった。局所再発および遠隔転移再発は認めなかった。観察期間の中央値は 843 日 (範囲 14-1812 日)と 775 日 (範囲 6-1789 日)であった。1 年生存率は 100%と 99%であり

3年生存率は89%と94%であった。

#### 4. 結果

今回の我々の研究に基づくとESDは高齢者に対しても安全に施行できた。そしてその治療は効果的であることが確認された。ESDは、表層性胃腫瘍の治療方法として年齢を問わず有効な方法と思われる。